

審査結果報告書【SCSA】人工種苗生産者・養殖場

認証事業者名	安高水産株式会社
認証番号	BV-KU-FA-0002
コントラクトNo	17840207
審査規格と基準	持続可能な水産養殖のための種苗認証(SCSA認証) 原則と基準 ver2.2 -
書類審査(文書レビュー)日	2023年3月17日
実地審査日	2023年3月21日～2023年3月22日
審査受審者氏名	代表取締役 安岡 高身 様
審査員(主任)氏名	櫻井 輝喜
同行者	佐久間智恵子(レポート確認)

審査総論

本審査において不適合事項が検出されませんでした。認証の更新の推薦をいたします。

(会社概要)

安高水産株式会社は、愛媛県南宇和郡愛南町深浦に所在する真鯛の養殖業者です。昭和25年鮮魚商として愛媛県南宇和郡城辺町深浦(現愛南町深浦)で創業しました。“仲買”でスタートしました。昭和43年 養殖部門設立、昭和51年9月に安高水産株式会社を設立、昭和58年には自社で生餌を生産する試みなどを行っています。(現在は、なし)昭和62年の段階では、加工部門創設、鮮魚部門(仲買)、養殖部門、加工部門の三部門で経営を行っていました。平成12年に加工部門廃止、平成14年に鮮魚部門を廃止し、養殖事業部へ一本化しています。この時日本初の自動メ機を導入しています。平成19年 全自動網洗い袋新設、ワクチン接種試験開始、平成22年 漁網洗浄ロボット船導入、平成23年 フィッシュカウンター導入、平成25年からクラウドを活用したIT化を行っています。平成28年 世界初の活鯛重量選別機導入、平成30年 デジタルフィッシュカウンター、活メ鯛皿式自動選別機を導入しています。取り扱い魚は、現在マダイのみです。
経営理念: 安心・安全で魅力ある商品を提供すること、社是: 社員の成長が会社の発展である、社訓: 活力と向上心をもって考動するを掲げています。IT化は図っていますが、あくまでも“人の技術を生かすための道具”とのお考えです。
平成30年 SCSA認証取得。資本金 850万円 年商22億 従業員数 34名、平均年齢 38才の若い企業です。
国内はもとより海外にも輸出しています。海外の場合、メてから4～5日後の喫食になり“質の差”が出てくるそうです。安高水産株式会社のマダイは高い評価を得ています。現在の課題は、国際情勢による餌代の高騰です。より効率的な給餌に取り組んでいます。
直近では、国際認証のBAPを2023年3月8日に取得しています。

(総括) (※各項目の詳細は、チェックリストを参照ください)

・SCSAの運用は、手順書「安高水産 養殖手順書 養殖トレーサビリティシステム(Ver.2.6)」(2023年3月16日改訂)に沿って実施され、良く管理されていました。認証取得以降継続して高いレベルの養殖運営を維持しています。
今回の審査は、リモート審査(3月17日)とオンサイト審査(3月21日～22日)を組み合わせて実施しました。リモート審査では、更新審査であるため手順書が「持続可能な水産養殖のための種苗認証(SCSA 認証) 原則と基準 ver2.2)」の要求事項を網羅しているか審査を行いました。
手順書、ホームページの企業理念、社長のメッセージを確認し、要求事項を網羅していることを確認しました。
認証の更新を推薦できるレベルにあります。

1. 種苗

SCSAとしての稚魚の購入先は、アーマリン近大(SCSA認証企業)のみです。
アーマリン近大から孵化した稚魚を購入し養殖しています。購入～出荷までのデータは、“養殖管理システム”で行われています。
稚魚の購入記録は、稚魚入荷チェックシート、送り状でも確認できました。アーマリン近大から商品履歴書を手入、保管され、適切な管理がされていました。

2. 対象人工種苗飼育管理

アーマリン近大から購入された稚魚は、搬入された生質をロット単位としています。養殖の段階で合体、分養を計画的に行っています。ロット単位で記録していました。合体を行う場合は、仕入れ時の同一種苗のみで行っています。
購入～出荷までのデータは、“養殖管理システム”で行われています。
ロット管理(生質単位)による識別・分別が確実に行われ、トレーサビリティも要求事項の数値基準も問題ありませんでした。
水産用医薬品は、適切に管理された上で使用しています。投薬記録、ワクチンの使用も、養殖管理システムに全て情報が入力されています。
逃亡管理として、沈下式生質を採用し、網点検を適時行い管理しています。
種苗育成から養殖、出荷に至るまで、ストレスや損傷を極力抑え、魚類福祉の考え方をもち適切な環境での飼育実施が継続されています。
養殖を行う海上施設は、飼育状況をよく観察できるしくみが施され、毎日、魚の泳ぎかたを観察し状況を把握し、対応しています。
養殖場の水質情報を愛南町、愛南漁協など各所より入手し、必要な対応を取っています。
各担当がタブレットで情報を正しく速やかに記録することが通常としてなされており、信頼性の高いデータ管理が行われていました。

3. 環境配慮

養殖施設は、「令和4年度深浦東海合同漁場図」に明確にされています。水質データは、愛内町「水域情報ポータル」、愛南魚協アプリより逐次入手し確認しています。
水温、塩分、DO、COD、透明度などを確認できる状況です。底質調査データは、産学共同で毎年測定され開示されています。各データが、産学から提供され閲覧可能な状態であり、活用しています。環境に恵まれたエリアであり、適切な水環境で養殖できています。
死亡魚の取り扱い、冷凍保存の上、漁協経由で専門業者にて適切に処理しています。

4. 餌・飼料

配合飼料を使用しています。ふからマダイ専用の餌を信頼がおける飼料供給先から購入しています。魚種や成長段階により判断し、状況にあった飼料を使用しています。
魚粉履歴証明書、安全証明書を確認し保管しています。配合飼料は、安全証明書に、“食料安全法”に適合している内容が記載されていました。購入頻度は、ほぼ毎日です。購入記録も全て保管されていました。給餌記録は“養殖管理システム”に入力され社員に共有されています。増肉係数の適正化やより良い品質の魚を提供するために、飼料メーカーとも協力してよりよい餌を探求し、給餌に工夫をしています。購入された飼料は、野鳥などのからの汚染を防ぐように網等で仕切り管理されていました。
本年より飼料供給先からジャストインシステムで供給してもらい、自社での保管量を極力少なくする取り組みを始めるそうです。

<p>5. 食品安全 養殖施設は適切な水環境での飼育ができる環境です。(3.環境配慮参照) ネズミ等の衛生動物は確認されていません。野鳥のフンによる衛生面の問題は発生していません。養殖や魚の扱いについて、年間スケジュールに基づき社内で食品衛生教育を行っています。 「安心・安全で魅力的な商品を提供する」という経営理念は社内に浸透しており、魚の丁寧な扱い、作業場の衛生管理状態、衛生的な器具の使用などを現場にて確認しました。</p>						
<p>6. 安全衛生・労務管理 労働安全衛生責任者は安岡社長です。安全第一を掲げ、安全装備の着用、船舶やフォークリフトの点検は適切に行われています。休暇も積極的に取得しています。教育は、主にOJTにて実施しています。安全を維持できる労働環境ですが、2023年12月26日に労働災害が発生しました。フォークリフトの運転ルールを守らず人と接触しました。即時、役所の届け出を行い、朝礼でルールの遵守を徹底しています。 ハラスメントの届け出対応は、外部弁護士へ委託しています。(※「外部相談口の利用方法」で掲示しています。)</p>						
<p>7. 社会経済的側面 外部組織からの情報入手や連携をしながら、法律遵守した運営がなされています。仕組みは、手順書「安高水産 養殖手順書 養殖トレーサビリティシステム (Ver.2.6)」(2023年3月16日改訂) で構築されています。教育では、手順書の理解促進を行っています。会社として常に向上・改善の風土を持ち、モニタリング、レビュー、見直しも適切に実施されていました。</p>						
変更事項						
窓口担当者連絡先変更		無		新担当者名		—
認証事項変更		申請者名称	<input type="checkbox"/>	申請者住所	<input type="checkbox"/>	施設一覧 <input type="checkbox"/>
—						
変更前			変更後			
施設コード	施設名称	住所	施設コード	施設名称	住所	
—	—	—	—	—	—	—
—						
最終報告日	2023/3/25	クライアントレビュー	2023/3/25	ピアレビュー	国立大学法人東京海洋大学 原田 幸子氏 2023/4/17	パブリックコメント